

地域交流講座

「21世紀を創るバイオの世界」



ひとひと
女・男
ひろば

<第40回>

子育ては自分磨きの
「充電期間」



月刊キャリア編集長
阿部 聡さん

妻が育児で煮詰まっていたので、なるべく残業をしないで子育てにかかわりました。この子どもとの時間は、掛け替えのない貴重な体験になりました。育児のためにやむなく仕事を辞めたという人も、夢を追い求める気持ちを持ち続けていけば、また必ず仕事は始められます。子育ては、そのための大切な充電期間、と考えればいいのではないのでしょうか。

夫婦とはいえ、異なった環境で育った人間が理解し合うのは簡単ではありません。若いころは、相手に喜んでもらおうといろいろな贈り物もしましたが、今はとにかく二人で一緒に時間を過ごすように努めています。互いの言葉が互いの胸にすうっと収まっていくときの幸せを積み重ね、また例えば道端の花を見て、お互いに目を見合わせて「きれいだね」とうなずき合うような、小さな感動を共有していきたいのです。

「有害物質と健康」(その2)

講師 環境安全科学研究室助教 川田 邦明さん

物質の有害性を評価するには、まず動物実験を行い、その結果から人に対する有害性を推定します。そして、人が一生の間に、毎日体に取り入れても健康に影響がない最大の量を求めます。この値を一日摂取許容量(ADI)といえます。食品添加物や色素などはADIを超えないように添加量が決められています。ダイオキシン類については、ADIの代わりに耐容一日摂取量(TDI)が使われ

ます。これは、動物実験の結果を人に当てはめ、さらに十倍の安全を考え、胎児期に体に取り入れることも考慮して決められた値です。こうして決めたADIやTDIを用いて有害性を判断します。実際にどのようにして安全性を確かめるのか、ダイオキシン類を例にして、お話ししましょう。

まず飲料水や食品、空気、土などに実際に含まれているダイオキシン類の濃度を調べ、これらの濃度から人が体に取り入れるダイオキシン類の量を計算します。もし、この量がTDIよりも小さければ、ダイオキシン類は健康に影響しないと判断します。この方法で日本人が体に取り入れるダイオキシンの量を求めると、TDIの約三分の一なので、日本ではダイオキシン



類は健康に影響しないと判断されています。

しかし、このような方法では安全性を正しく調べられないという意見もあります。例えば、ADIという考え方が正しいのか、求め方は正しいのか、という指摘があります。また、体に取り入れる量を決めるとき、個人差はないのか、地域による違いはないのかという指摘や、多くの種類の物質を同時に取り入れたときでも安全なのか、という指摘もあります。今後、こうした問題点についても十分に考慮して、より正しい方法が開発されることが期待されています。

* 地域交流講座「21世紀を創るバイオの世界」は今回で終了します。



新潟バイオリサーチパーク推進機構株式会社
「設立1周年記念講演会」を開催(5月28日)

緑の風薫り 笑顔ゆきかう ふれあい文化都市

にいつ
新 津

新津市第3次総合開発計画：平成7～16年度

水と緑のまち

快適で安らぎが漂うまち

人が輝き活力のみなごまち

にぎわいと交流のまち

明るく元気なまち

健やかで優しさが響きあうまち

豊かな人間味と文化の薫るまち

個性豊かな文化のまち